

# 物語論の情報学：物語・修辞・文学

## Informatics of Narratology: Narrative, Rhetoric, and Literature

企画者・話題提供者 金井明人（法政大学）  
小方孝（岩手県立大学）  
話題提供者 岩垣守彦  
森田均（長崎県立大学）  
指定討論者 内海彰（電気通信大学）  
小田淳一（東京外国語大学）  
川村洋次（近畿大学）  
戸梶亜紀彦（東洋大学）

### 企画趣旨

「文学と認知・コンピュータ II」研究分科会（LCCII）は年間数回の定例研究会を開催しているが、その際にワークショップなどで特定のテーマに関する議論も継続的に行っている。更に、認知科学会の全国大会でも LCCII の幹事によってワークショップを開催し、研究分科会へのコメントを広く認知科学会全体から求め、研究分科会の研究活動内容を披露する機会としている。

2009 年のオーガナイザー三宅芳雄氏によるワークショップ「創作、鑑賞の理論—勝手読みの視点から」では、文学における「読み、解釈、受容」、「生成、制作」、「書き手の意図の推測と非推測」、「受容理論＝生成理論」、「勝手読みの不可能性と可能性」など、「勝手読み」という切り口から、文学理論の主題とも重なる多くの話題が析出された。

2010 年のオーガナイザー森田均氏によるワークショップ「文学の生成」では、文学や物語や芸術その他を「生成」という観点から捉え、「生成の思弁的考察」、「生成の認知科学的検討」、「生成の人文・社会科学的な分析や考察」、「生成のシステムシミュレーション」など広い意味での文学の生成に関連する議論がなされた。

また、これらの成果もふまえ、2010 年 10 月には、分科会メンバーである小方孝・金井明人の共著によって学文社より『物語論の情報学序説・物語生成の思想と技術を巡って』という単行本も出

版されている。

この度のワークショップでは、以上の研究活動を発展させ、特に物語・修辞・文学を巡って、「物語論の情報学」をキーワードとして、あらためて討議すると共に、議論を広く公開し、多数の参加者から意見を求めたい。

### 物語論の情報学と認知映像論

金井明人

物語映像には受け手の認知に適応した映像の修辞と、そこから逸脱した映像の修辞がある。また、受け手の認知に適応、あるいは利用しながらも、最終的にそこから逸脱していくことで両者が同時に成立している映像も存在する。

ここで鍵になるのが小方・金井（2010）でも論じた「もう一つの映像」という概念である。「もう一つの映像」は受け手の認知によって初めて顕在化する映像の側面であるが、受け手がストーリーや映像に関するスキーマをそのまま用いるのではなく、緩和なり切断をすることによって接することが可能になる。これは、映像から、送り手が意図して制御しようとした（広義の）物語を除いた、残りの部分に相当し、「映像の論理」にも繋がる。とはいえ、それでも映像が様々な意味での「認知」から逃れられない以上は、依然として物語の中のある側面なのかもはしれない。

そもそも映像には、送り手が制御している要素

と制御しきれていない要素がある。これは映像が非中枢的あるいは機械的な性質を持ち、他者や世界そして物語を対象としている以上、必然的に生じるといえる。例えば、登場人物の身体や背景、天候などは、送り手が制御しようとしても、それが完全に可能ではない場合があるし、そこにカメラなど、機材の性能も関わってくる。また、映像の時間的構造や空間的構造により生じる物語の完全な制御も、常に可能なわけではない。この「制御不可能性」が「もう一つの映像」と関係している。

なぜ、これらの映像の側面をも扱うことが必要か。それは「世界を再現・再構築するもの」ではなく、「世界を捉えるもの」として映像を位置づければ明らかであろう。「制御不可能性」をはらみ、反/非=物語を含むのが、世界の論理なのではないだろうか。

その一方、プログラムの生成されるCGやエフェクトの存在、さらには映像作成の様々な工程のデジタル化をふまえれば、映像は(外見的には)、世界を再現・再構築する物語論の情報学に限りなく接近しつつある。しかも、そこでは「制御しきれない要素」、あるいは「もう一つの映像」は、避けるべきもの、あるいは無いものとして扱われつつあるとも言えるのかもしれない。

とはいえ、様々な映像を内容に囚われず、自由に制作・撮影することが技術的に可能になり、誰もが映像を自由に発信できる現状は、「制御不可能性」や「もう一つの映像」が強調される可能性自体は、むしろ高まってきている。

また、非中枢性を強調し、「制御不可能性」や「もう一つの映像」に向けたコンピュータの利用は、映像では、(経済的な理由が絡んでいることもあるが)現状ではあまり成されていないとはいえ、コンピュータを介在させてこそ、原理的には、文字通り「機械的」に、確実に、「もう一つ映像」を生成し続けることができる。

「制御不可能性」「もう一つの映像」などに対応した概念は、未だに十分に流通していないため、その存在が十分に認知されているとはいえない。

したがって、様々な形でその存在を明示的に示し続けていく必要があるし、プログラム中でも戦略として組み込んでいく必要がある。映像に留まらない広がりを持つ、「流動と固定」「～でないものとしての物語生成」などに代表される小方が用いる様々な概念はその意味でも重要である。

そして、「私」の物語論の情報学では、認知映像論的な観点から、受け手の認知や物語にできる限り寄り添うことで、そこからの切斷あるいは緩和としての「もう一つの映像」に接近したい。

## 「物語論の情報学“序説”」を抜けて— 流動と固定 (14)—

小方孝

### 1. (語り手→聴き手) →語り手

もともとはふたつの「序説」を計画し、ほぼ同時に上梓することを夢想していた。『物語論の情報学序説—物語生成の思想と技術を巡って—』がそのひとつに相当するが、仮題で『物語生成システムのテクノロジー序説』をそれと対になるもうひとつの序説にするのが真の目論見であった。この計画は潰え、後者の完成にはあと幾許かの時日を要するだろう。ここでは先回りしてふたつの序説を通じて目論んでいること、さらに序説を抜けた向うに遠望される風景について幻視してみたい。その序説、一步先へ進んだ序説である。

物語生成システムのテクノロジーの序説で計画していたのは、比較的近い過去から現在に渡って様々な動機に基づき様々な文脈において行われて来た物語生成システムの研究を主に技術的な側面から総体的にまとめる作業であり、さらにこの研究史を背景として私の統合的な物語生成システムの構想と少なくともひとつの試行を記述することであった。つまりこの部分は私の表向きの研究活動に直結したものであり、その直接的な発展を意図したものであった。だから本来はこの序説の方の本を先に刊行することが望ましかったが、物語論の情報学の序説の方が結果的に先に進められて

しまった。統合物語生成システムは現在の私の水準にとっては遥かにその先に位置するが、しかしその先は単にこの技術的なシステムにのみ収斂するものとして考えられているのではなく、その先において収斂すべき場所の夢想が物語論の情報学の序説の方で試みられた事柄である。しかし必ずしも順序が逆になったということの意味する訳ではない。統合物語生成システムが完成することがその先へ向う道が開けることになるという順序が当り前のように思われもするが、技術とシステムの完成は殆どあり得ない夢のようなもので、それを待っていては何も出来なくなる可能性が大きい。技術としての物語生成システムの開発自体を窮極の意味での最終目標としないのであるとすれば、それが未完成のうちに既にその先に見取り図を描きさらにそのための作業に着手する必要がある。その繰り返しを通じてしか何事かを達成することは適わないと思われる。

物語論の情報学の序説の方で狙ったのは、物語論を物語の方へ進めることであり、また聴き手(受け手)を語り手(送り手)の方へ進めることであった。物語論は総体として(受け手を重視するにせよ送り手を重視するにせよ)受容(聴き手, 受け手)の側からする対象としての物語の分析を行う研究ジャンルであるが、物語論を物語に移行させるとは物語を対象とするのではなく物語を実践することであり、それに伴って聴き手(受け手)としての立場を語り手(送り手)としての立場に移行させることである。

文学研究は語り手(送り手)中心の立場から聴き手(受け手)中心の立場に推移するという歴史的過程を辿ったが、そのことを踏まえた上でさらに語り手側に重心を移すという作業に私自身を送り出すということが、恐らく『物語論の情報学序説』を通じて遂行したかったことであるように思える。

## 2. 「物語としての現実の陥穽を切り抜ける隘路はあるか」補遺

『物語論の情報学序説』の奥付に記述された刊行の日付は2010年10月20日であるが、その日から数ヶ月が過ぎた2011年3月11日という日付は、将に歴史的なものとなった。私が盛岡近郊の大学や盛岡市街地の自宅で家人と共に経験した諸々の事柄は私の生涯において恐らく最も忘れられない熱した記憶の塊として残り続けるに違いないが、それを悲惨であると言うことが憚られる程の真の意味での悲惨が膨大な人々を一挙に呑み込み、その巨大な波は未だ一向に引こうとする様子もない。

ところで生憎と言うべきか、今年の人工知能学会全国大会は6月1日から私の住む盛岡で行われる予定になっており、直前まで開催が危ぶまれたが、結果的には震災後初の盛岡での学会として盛況の内に終わった。その初日、会長の西田豊明氏(京都大学)の提案により、「緊急パネル:大震災と向き合う」が行われ、私も発表・討論者の一人として参加した(他の参加者は東北大学の正村俊之氏と産業技術総合研究所の野田五十樹氏)。私の発表タイトルは「物語としての現実の陥穽を切り抜ける隘路はあるか」(文章は、予稿集中の西田・正村・小方・野田「緊急パネル討論:大震災と向き合う」の一部として収録)というもので、もともと8分間の予定が15分近く話しても終らなかったため中途半端なまま打ち切られてしまい、最後に本当に言いたかったことまで達しなかった。そこで本稿をその本当に言いたかったことについて触れる機会として利用する。本当に言いたいことは常に曖昧であり、曖昧でなくなるということは、言いたいことから言ったことに変質したことを意味する。上記の発表では結果的に先延ばしすることになったが、ここでは曖昧さを抱えたまま議論に踏み出すことにしよう。

3月11日以来、当然の如く、「地震」「原発」「復旧」「復興」「日本人」「東北」「放射能」等々、現実との強固な対応性を持った、多様でありながら一様な共通主題を巡る言説が、新聞、テレビ、ラジオ、雑誌、本、コンピュータ、舞台等様々なメディア上で、ニュース報道、解説、論評、批評、感想等様々なジャンルにおいて、展開されており、

それは一個の言説空間を構成している。これは、これからのこの国の、この世界の、また私の、物語が創られて行く、集合的な言説である。そして言説のタイプを、文学的／物語的言説、政治的／政策的／制度的言説、科学的／学問的言説、個人的／私的言説等に分類することが出来る。それぞれにおける例を講演では取り上げたが、ここでは繰り返さない。問題は、様々なタイプの言説において制度的言説との関係が錯綜しているということであり、より端的には諸種の言説の中に制度的言説の性質が程度の差はあれ浸透しているということである。最も単純で愚昧なものとして石原慎太郎の天罰発言や（物語の中ではこの男は既に死んでいる、あるいは多数の刃によって殺されている。死者を知事に担いだ東京都民を私はある意味で尊敬する）、やや高度だが素朴なものとして内田樹の非日常性と物語性とを接合させる論等、物語が容易・安易に作られるということもこのことと関連しているだろう。物語が制度的言説を補強する技術になり得るのは、物語そのものの制度性という認識からは簡単に想像することが出来る。「危機管理」の名の下に、情報の隠蔽、虚偽情報の公表、情報流出源の曖昧化等々多様な修辞（レトリック）が殆ど実も蓋もなく駆使され、制度そのものが恰も物語生成システムになってしまったかのような状況が現出したことは、不思議なことではない。

バフチンの多声性の概念は恐らく積極的な概念として解釈・利用されているが、言説における声の単純な相互浸透性ではなく、制度的な声の時として一方的な浸透性、また制度的な声への物語的な声の浸透性など、声の透明なあり方や多元的なあり方に背反する不均衡という消極的な状況を述べるのに、私はバフチンの多声性を重ねてみた。それが動的な概念であるとするれば、現在までの様々な声の不均衡な共存を均衡させ、あるいは別の方向に不均衡化させる力の存在に焦点を当てて思考や実践を展開させて行くことは可能だろう。

もうひとつの理論的装置として、私は吉本隆明の共同幻想論を持ち出してみた。共同幻想論は、

対幻想論であり個的幻想論である。共同性や制度性が優位に立つ大状況において、家族・親族の対幻想や詩や文学に結実される個的幻想の強度を保守することが後ろめたいことではないことを、共同性や制度性の歴史的な根深さの認識を伴いながらきちんと認識することの価値を教えた思想が共同幻想論とその周辺の書物における吉本であった。恐らく我々の世代は、対幻想と個的幻想優位の社会が既にそこにあったという原体験を持ち、それを獲得するという過程を経ることがなかったことから、逆に共同幻想に対して非参与的で且つ無警戒な心性を予め付与されており、構築するものとしての制度や公共性に対する意識や実践において弱いという性質を克服することなく今日に至ったのかも知れないということは認めなければならないが、言説空間において、別の言い方をすれば、大きな物語と小さな物語がせめぎ合う現在、そして大きな物語が思いがけず暴力的で巨大な力を揮いつつある現在、小さな物語としての対幻想や個的幻想の価値を実質的に保持する運動を、様々な形で組織化しなければならない歴史的な地点に我々が立っているということの認識に覚悟と強度を付与する試みは重要であると信じる。

一挙に飛ぶ前に、人工知能という技術の研究者としての私は、技術の多声性・多元性とでも言うべきものについて考えてみた。組で示せば一実作業のための技術（物理的技術）／コミュニケーションのための技術（精神的技術）、便利・効率のための技術／生存・死なないための技術、成長のための技術／継続・持続のための技術、経済のための技術／文化のための技術、一般のための技術／私のための技術、と技術の領域を拡張し、また価値意識をずらしてあるいは異なるものに移行させて考えてみることは可能である。また、平時—フレーム内—論理—想定内—直ちに役立つための組織論／非常時—フレーム外—物語—想定外—直ちに役立つための組織論、といった対を考えてみることも出来る。このように言い、このような事柄について議論することは容易く、また如何なる主題に関しても多様性の幅が広がることは一般

的には望ましいことであるが、問題は声の発信地点であり、重要なのはそれを明らかにすることである。科学者が制度的に物を語るということはそれ自体奇異なことではなく、時として必要なことであるが、重要なのは、科学の言説と制度の言説とが相互浸透しているという現象の認識である。より望ましいのは送り手による自己認識であるが、場合によっては受け手による認識でも構わない。

表層的な水準を超えてそのような認識が不可能であることは認めながら、私が私自身の声をどのように認識するのか、あるいはどのように形成しようとするのか、ということがここから先の問題であろう。唐突だが、東北地方の人々の対外的な寡黙や沈黙は差別の果てに形成された無意識化された戦略であり、それは如何なる素朴さとも、人格の立派さとも無縁なものである。対外的な寡黙や沈黙は大音声による狂騒と表裏の関係にある。そして時として悪辣なもの結び付いている。その種のものではない沈黙や寡黙や言葉のない言説はないだろうか。言説空間の中に位置を占めることのない沈黙の言説はないだろうか。多分ないだろう。しかし数々の私的言説・詩的言説の集積から滴り落ちるようにして別の水準に形成されるような可能性としての沈黙の言説が少なくとも可能性として存在することを想定しても許されるだろう。私は物語生成システムを、個人的な「声にならない声」を物語に仕立て上げるための私的・私的な道具、社会的関係も遮断する位の個的幻想と対幻想に塗れた文学独自の領域を見るための道具として捉えたい。

### 3. 物語論ではなく物語の構図

山内昌之は「本質的に日本の社会構造を根本的に変えるほどの大変動」として、15世紀の応仁の乱と1970年代の高度成長のふたつを挙げている（『復興の精神』（新潮新書）、2011所収の「公欲のために私欲を捨てよう―災後の歴史認識」よりpp.69-70）。そして後者の大変動は今も未完のプロ

ジェクトとして現在進行形としてあり、特に1990年代以降の我々は、ヘッセが「鳥は卵の中からぬけ出ようと戦う。卵は世界だ。生まれようと欲する者は、一つの世界を破壊しなければならない。鳥は神に向かって飛ぶ。神の名はアブラクサスという。」（高橋健二訳、『デミアン』、1919）と書いたような状況の中でうごめき続けている。三島由紀夫は将に1970年という年に、その後に待ち受けている陳腐さ極まるに違いない絶望を先読みするかのように、「私はこれからの日本に大して希望をつなぐことができない。このまま行ったら「日本」はなくなってしまうのではないかという感を日ましにする。日本はなくなって、その代わりに、無機的な、からっぽな、ニュートラルな、中間色の、富裕な、抜目がない、或る経済的の大国が極東の一角に残るのである。それでもいいと思っている人たちと、私は口をきく気にもなれなくなっているのである。」と書いた（「果たし得ていない約束―私の中の二十五年」、サンケイ新聞、1970.7.7）。そして我々はひとつの大きな物語が終焉したことを大きな物語自体の終焉であると（かなりの程度故意に）錯覚して、小さな物語と言うには気が退ける無意味な些事に拘泥しながら悪戯に時をやり過ぎて来た。そして2011年3月11日がやって来た。

これまであまり考えたことがなかったが、1925年生まれの三島由紀夫は1958年生まれの私にとって父の世代に当る。私の本当の父は1930年生まれである。三島の死の年である1970年から時代は大きく変化し、同じく私もその年を起点として子供から大人に向けて変化して行った。それから連続線上に2011年に至ったような気がする。三島は莫大な業績を残して45歳で死んだ。私は何ひとつ残さず52歳に至ったが、ひとつの時期は終わった気がする。すなわち、1970年11月25日から2011年3月11日はひとつの時代的な塊である。そこから過去に遡行すると、三島の生きた世界や、そこから見れば全く影の方に、私の父達が生きた世界があり、しかしながらそれらはひとつの時代を共有している。そして更に遡れば、

文学や歴史というテキストを通じて浮上するひとつの文化と社会の像がおぼろげに見えて来る。逆に、2011年を起点とする未来の時間・時代は無論過去のようには既に記憶され記録されたものとしては存在しないが、それを様々な仕方で想像の中で存在せしめることは出来る。私にとって物語生成システムの主題は、以上のように整理しようとするならば整理してみることが出来る時代的・時間的単位の重層・輻輳として構成される私的な物語を作るという作業であり、その意味でその研究は、私小説ならぬ私研究であるということになる。

## 「物語論の情報学」に対する私の立ち位置

岩垣守彦

私たちは表現の新鮮さに驚くことがある。基本的には、それは独創的な「情報の選択・組み合わせとその表出」の結果であるが、多くの場合、発信者は受信者の受容とその効果を予測している。このような「情報・選択・組み合わせ・表出・効果・受容予測」を、なるべく単純な一つの仕組みとしてとらえたいと思ってきた。そうすると、表出媒体の多様性を超える共通の基盤、言い換えるならば、ある情報が発生したときの伝達の方法・媒体・情報受容の仕組みなどの基盤を、人間・動物・自然のすべての営為に通ずる「情動の発露」に置かざるを得ないと考えた。その観点に立つと、情報を「ありのままに伝えたい」という欲求を軸にして、「情報伝達」とは、一次的動因に対する「情動」、すなわち、「充足・満足・安心と不足・不満・不安」において、後者の状態にある情報[お腹を空かせた(赤ん坊)]を、様々な表現媒体[泣く]を通じて「意図的」[火がついたように(泣く)]に前者の状態を求める「情動の意図的な発露」ととらえることができる。それを単なる行為と見るか創造行為と見るかは受信者の受容感性[母親が授乳するかどうか]によるが、「情報の意図的な伝達」は「不快を快へ変える原初的型」(物語原型+原初の事象展開)を基に発露されるのである。し

かし、情報の伝達に使われる「発露の媒体(音・声・音声・身体・画像・文字・映像など)」は「直接画像(figures)[身体・画像・映像]」を利用するものと「想像画像(image)[音・声・音声・文字]」を喚起させるものと分けることができ、しかも、「直接画像(figures)[身体・画像・映像]」を組み合わせる「想像画像(image)」を喚起させる素材となる。したがって、どちらの媒体を使っても、発信者によって提示されるものは「想像画像を喚起する透かし線描」(image-evoking perspective drawings)とも言うべき不完全態であり、「情報伝達」はすべて発信者自身も含めて受信者が勝手に色づけをして完成させるという「予測的協同創造(anticipated collaboration)」である。このような観点に立つて、人間の情報伝達の行為を統一的に解釈することを試みる。

## 分析と生成とを架橋する試みあるいは未遂の「情報学的」創造

森田均

「普通」の「科学者」ならば分析にはサンプルを用いる。いや、その前に「研究」の「対象」や「方法」を明確にしておく。サンプルを用いるのは、網羅的な取り組みの放棄ではあるまいか。サンプルを用いないとすれば、全体と対峙するしかない。私の試みは、文学の解体を目指す。なぜ文学部の卒論は作家の全作品を読んでいなくてもでっちあげることが出来るのか。こうした疑問が私の出発点となっている。一卷の全集のみが公刊された早世の作家を「対象」とした卒論[1]は、全て読んだと胸を張る若僧によるささやかな作家論に過ぎなかった。そのあまりの矮小さに悲嘆して挑んだ修論[2][3]は、輸入可能な限りの理論によって武装していたにもかかわらず、製本もしていないビラの作品論になった。10年を経て情報学的アプローチを取った[4]が研究の原点である。[5]で方向性を確定したものの、[7][8]で「注文の多い料理店」悉皆調査を志向したことによってようやく独自性を獲得し、[9]で方法論を定めて[10][11]に

結実した。悉皆調査は、メディア論の分野でコミュニティ放送局全ての web を調査すること[6]から始めており、テレビ放送開始から現在にまで至る番組コンテンツの分析[12] [15]に至っている。一方で[1]から[11]まで貫いていた受容理論から作者問題を再考する契機となったのは[14]だが、以降は[13]のようにメディア論との接点を持ちつつ[17] [18]へと至っている。[16]ではまた悉皆を試みながら壁の前にいる。悉皆は、対象と方法を後付けするのに好都合だ。ところで情報学的アプローチで文学の創造は可能になるのかね。そういう問いを発したいな。

#### 参考文献(以下筆者の単著・第一著者論文のみ)

- [1] 誰も、誰も返事をしないのか???, 明治大学大学院紀要 24(4), 295-308, 1987.
- [2] 『ヘッセンの急使』試論, 明治大学大学院紀要 25(4), 329-339, 1988.
- [3] 架橋できない溝, 明治大学大学院紀要 26(4), 351-364, 1989.
- [4] テキスト/ハイパーテキスト/文学理論, 日本認知科学会テクニカルレポート No.29, 33-43, 1999.
- [5] ハイパーテキスト文学論, 認知科学第 8 巻第 4 号, 327-334, 2001.
- [6] コミュニティ放送局のインターネット利用, マス・コミュニケーション研究 59 号, 178-192, 2001.
- [7] 小説のハイパーテキスト化とメディア比較, 日本認知科学会第 20 回大会発表論文集, 172-173, 2003.
- [8] 文学作品のハイパーテキスト化における評価方法の精緻化, 人工知能学会全国大会(第 18 回)論文集, CD-ROM, 2004.
- [9] 文学におけるグラフ・地図・樹状図, 人工知能学会全国大会(第 19 回)論文集, CD-ROM, 2005.
- [10] フローティング・ハイパーテキスト ―概念の起源と展望―, 県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要第 7 号, 145-156, 2006.
- [11] 文学テキストのハイパーテキスト変換 ―コンピュータを利用したテキスト研究の新展開―, 雄松堂出版, 2007.
- [12] テレビ番組としての平和式典と長崎くんち, 県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要第 8 号, 139-154, 2007.
- [13] 内と外のレトリック, 人工知能学会全国大会(第 21 回)論文集, CD-ROM, 2007.
- [14] 受容理論は生成の夢を見るか? --秋元氏へのオマージュ, LCC II 第 18 回定例研究会予稿集, 18W-05, 2009.
- [15] テレビ番組のコンテンツとしての平和式典と長崎くんち, 長崎県立大学国際情報学部『研究紀要』第 11 号, 193-207, 2010.
- [16] 桃太郎: いじくられた物語をいじくる, LCC II 第 20 回定例研究会予稿集, 20G-05, 2010.
- [17] 実世界から作品へ, LCC II 第 23 回定例研究会予稿集, 23W-01, 2010.
- [18] 作者問題再考, LCC II 第 24 回定例研究会予稿集, 24G-08, 2011.